報　　告

# 南　米，今　は

金沢大学名誉教授
富山県農村医学研究会長
豊　田　文　一

私は，置県100年記念富山県南米親善訪問団の一員として参加，ペルー，アルゼンチン，ブラジルの３ヵ国を訪問し，現地在住の県出身の人々と交歓親善の実りをあげ，成果を収めて帰国した。この間，訪問した国々で色々と見聞し，考えさせられることも多く，ここに書き綴ったものであり，私見も混えて記述してみたい。

なお，私は昭和52年富山県人ブラジル移住50周年記念にもこの地に渡航したが，６年間の時の流れは，激動の世界情勢のなか，その変貌は著しく，当時を偲んで思いを新たにした次第である。

## 1．ペルー

首都リマは，スペイン文化に恵まれ，南欧風の建物に彩どられた美しい古都と聞かされていた。しかし空港からホテルに向う道すがら，あるいは街はずれだったかも知れないが，うすぎたない服をまとい，また道ばたにたむろしている人々，住居の土塀はくずれ落ち，土とレンガでしつらえられた平家建ての家は，所々欠け落ちてほこりにまみれている。街路を走るバスは，日本では30年前にも見られたような旧式のボンネット型，それも塗料が剝げ，赤錆がむき出し，車体も所々凹み，よくも動くものだと思われるような代物が，大きな響きをふかしながら動いている。乗用車にしても同様。唖然としたのは私ばかりではない。あとで聞いた話だが，バスは何処へ行っても邦貨で23円，うべなるかなとも思える。

第１図　リマの街を走る旧式バス

さてペルーは赤道から南緯18度にまたがり，熱帯気象を想像されるが，南極からのフンボルト海流に洗われ，その影響で月平均気温，夏（２月）でも22.5度，冬（８月）でも15度といわれる（リマ)。地勢的には，東西に３つの地域に分けられ，太平洋に面した海岸平野，中央部アンデス山系，東部アマゾン上流の熱帯セルバ地帯である。アマゾン上流は所々盆地があるものの多くは原始密林，海岸平野は巾僅かに40～50km，それも長さ 2,200kmに及ぶ細長い平野で，アンデスからの河川が，所々横断し，その両岸だけが緑地帯となって灌がい耕作が行われている。ここに多くの海岸都市や港が発達し，人間の居住地区になっている。出発前，金大がん研へ留学しているペルー人女性マリア・デル・ピラールに色々と国情を聞いてきたが，リマは一年中ほとんど曇か，霧がたちこめアンデスの山々を望めることがない。年間降雨量60mm，私どもが古代プレ・インカの遺跡パチヤ・カマックの視察への途中，パン・アメリカン・ハイウェー(アラスカ―チリ)を車で走ったが，その両側の砂漠に

屋根のない住いも散見された。中央のアンデス山系は300～400kmの巾で，ペルーを２列または３列に並行する山脈となり，多くの火山を有し，6,000m前後の高さでペルーを縦断し，その間 4,000m前後の高原地帯にインカ文明が築かれた。この高原地帯に多くの湖水があり，3,000mの所にあるチチカカ湖も含まれる。不毛の海岸地帯と対照的に深い熱帯密林で，土壌が肥えているものの開発が進んでいない。

このような状況で，人口 1,780万を養うために最大の輸入は穀類である。ただこの国は，鉱物資源の埋蔵は極めて多く，輸出の最たるものは，銅，銀，亜鉛，それに恵まれた海洋からの水産加工品である。日本からの輸入は，輸送機械，鉄鋼，電気機器等4億4千3百万ドル，日本への輸出は上記の産出する原鉱，また鋼，水産物などで５億４千万ドルで，日本の入超になっている。(1982)　進出企業45社，在留邦人 8,287名(長期滞在 927名，永住者 7,360名）でこれらの多くは地下資源の開発に当っているものが多い。実は岐阜県神岡町の三井鉱山の事業も，イタイイタイ病の原因説に災いされて，従業員 5,000人から 1,500人に減少し，事業の縮圧分はペルーあるいはチリで作業していると聞いている。日本はペルーにとっては米国についで主要貿易国である。交通はパン・アメリカン・ハイウェーは主動脈で，鉄道はアンデスに阻まれて発達せず，海岸線より40～50kmの鉄道があるに過ぎず，これも原鉱の運搬が主で，旅客用ではないらしい。ただ南部国境に近いモエンドからチチカカ湖―クスコーマチュピクチュまで約 1,000kmが通ずるのみである。

さてリマの市街を歩いてみると，先に述べたように所々にたむろする若ものの群が眼につく。これらは失業者の群である。1982年労働省の調査によると完全失業率 6.8%，半失業率46.4%をみてもこの国の経済状況が推測される。最低賃金は月9万6,000ソル（1983年３月）約１万円である。しかしリマ市中の一

第２図　職なし青年らがたむろしている。

廓に高級住宅街も見られ，中央部に高層ビルも少なくないが，市街をとりまく，小高い丘陵地帯は，折り重なるような灰褐色じみた土づくりの住いがひしめいている。あたかも廃墟のように望見される。それも岩肌をむき出し，幸いに雨量がゼロに近いから崩れ落ちる心配はないようである。余りにも丘陵地帯だけなので聞いてみると，ここは国有地で，難民をここに集めスラムを作らせたということである。

第３図　リマのスラム街

この国の政情は，ここ50年間不安定で，クーデターが繰り返えされ軍事独裁―民政―軍政―民政とめまぐるしく，現在人民行動党のフェルナンド・ベラウンデ・テリ氏が大統領となっているが，経済成長率 0.7%（1982）となっているものの今後の動向は予断を許さない。ただ主要産業である銅，銀，亜鉛の採掘製錬に望を託されているし，最近アマゾン上流で石油の開発に光明を見出している。

ペルー領内アマゾンの石油開発の始まった

のは1968年10月，ベラスコ政権が登場してからである。奥アマゾン西方の広大な堆積盆地は，石油の母層たる新生代第３紀層（2000万—4000万年前），中生代層（5000万—1億5000万年前），古生代層（1億5000万—4億5000万年前）が厚く発達している。ここから石油が出るか出ないか，この地域をとりまく諸国にとっては，開発途上国から浮上できるかどうか国運をかけた問題だといわれる。1971年エクアドル国境近くのアマゾン地区で日産3000バーレルの石油の産出に成功した。この成功はペルーに石油ブームを巻き起こした。これによってペルー政府は多数の外国資本を導入，アマゾン流域からアンデス山中のポルクージャ峠（2,200m）を越え，太平洋岸の砂漠の漁村まで全長852キロの石油パイプライン（輸送力１日50万バーレル）を敷設，日本からもこれに３億３千万ドルを融資した。埋蔵量は９億バーレルといわれ，このペルー領内のアマゾン奥地の原始林は伐採され，赤肌をむき出して試掘基地や大型輸送機用滑走路が，上空から眺められるという。この成否がペルーの政情，ことに財政危機を左右するもののようである。

さて私は海外に出ていつも感ずることは，一民族一国家のよさである。例えばソ連にしても15社会主義共和国と20民族，各民族にそれぞれの言語を有している。米国にしても，政府機関民間を問わずどこへ行っても星条旗がはためいている。これは，各種民族の統一強化のための象徴と聞かされた。

南米ではアルゼンチンを除き，各種民族，部族の集合体である。このペルーもインデオ47%，混血（白人のインデオ）40%，白人12%，東洋人１%，なお日系移住者は７万人に近い。僅か12%近い白人がスペイン領有以来，４世紀半にわたり統治の実権を握り，かつてインカ文明を誇ったインデオを始めその他の民族，部族は社会の底辺におしやられ貧困に喘ぎ，文化に恵まれず，アマゾンの谷間，あるいは密林にひっ逼し，ここで生活の糧を求めて，生きながらえている。彼らはいつの世にか光の世界へはいあがるだろうか。あれを思い，これを考えながら短時日の行程を終え，ペルーを離れる。

## 2. アルゼンチン

かつて訪ねたとき首都ブェノスアイレスは，碁盤の目のように整然と区画された街並み，重厚なヨーロッパ風，ことにスペイン，フランスの美しさをとり入れた建物に混って近代的な高層ビル，市内各所にプラザ（広場）と公園の緑，５月通り（AV. de Mayo），７月９日通り（AV. 9de Julio）などでは美しい緑濃い街路樹が調和し，南米のパリともいわれる一大美観を呈していた。しかし今はインフレと物価上昇に打ちのめされ，ことに10月31日は大統領選挙で，街角では群衆の大集団と喧噪，まき散らされたビラは風に舞い，きれいなビルの壁にはスプレーでぬりたくられたスローガンは眼をおおうばかり，数年前訪ねたブェノの印象はどこかに吹っ飛んだ。

私は，知り合いのキヨザワ兄妹に案内されて街に出てみた。ホテル近くの Bank Tokyo（東京銀行支店）前の掲示をふとみると，定期預金のレートが記るされている。本日の利率は１ヵ月17%，１年420%，眼を疑って確かめたが間違がない。しかし考えてみれば，アルゼンチンの物価上昇率は，1980年87.6%，1981年131.3%，1982年209.7%，さらに1983年は 300%を越えそうな予想もでている。またこの６月１日，デフレ（平価切り下げ）を断行し，交換したペソ紙幣は新旧とりまぜ，エージェントから「古い紙幣は０を４つ消して計算して下さい」といわれ，新旧紙幣の混在流通は私どもを迷わせる。とにかく貨幣価値の変動は著しく，２ヵ月前日本で説明をうけた交換率は１ドル＝10ペソ，ここにきてみれば公定で１ドル＝13ペソ，私どもは特別のはからいでエージェントから交換してもらったものは１ドル＝22ペソ，（やみ値），外貨不足が

眼をおおうばかり，これが到着後の私の第一印象である。市内の中央にある国会議事堂は国の威厳を象徴する豪華な殿堂である。この前でキヨザワ君らは「この議事堂は人の子一人いない空屋ですよ」という。すなわち国会が停止され閉鎖されたからである。

最近の情報によれば大統領選挙の結果アルフオンシン氏が当選，12月10日就任式が行われ，８年振りの民政の復帰で，国民はお祭り気分によっている。ブェノの中心街はカネ，太鼓を打ち鳴らしながら徹夜でデモ行進すれば，車もクラクションを鳴らし，1976年以来閉鎖された国会議事堂には赤々と照明燈がつき，夜空にくっきり浮び上がっているという。暗い夜空と光に浮んだ国会議事堂，デモ行進する人々，これは軍政への別れと民政への期待の渦巻きとも思える。

もともとアルゼンチンは1516年，スペイン人ホワン・ディーアス・リリースの率いる探険隊がラプラタ河口に到達して以来，引き続き遠征隊により土着のインデオを征服しつつ植民を行い，人口増加とともにスペイン王のもとで副王がおかれ，(1776年）スペイン直轄の地となっている。しかしその後，スペイン本国人とクリオージョ（現地生まれのスペイン人子孫）との軋轢と他方アメリカ合衆国の独立，フランス大革命の影響もあり，スペインから離脱の気運が醸成されてきた。その気運に乗って旧勢力と解放戦線との激しい抗争が続き，これを抑えて1816年，建国の父といわれるサン・マルチン将軍が内外に向って独立を宣言した。以後歴代の政権は，農牧立国を国定とし近代化にむかい，積極的に外国資本と移民を導入，また広大な国土を利用した大土地所有制度が農牧の基盤になった。しかしその後大都市商人，労働者を中心とする新興階級が形成され，大土地所有者に対抗する勢力をもってきた。このような情勢のなか第２次大戦後1946年，ペロン氏が大統領に就任しナショナリズムを標榜しつつ政治的に労働者優遇政策をとり，労働者を基盤とした支持勢力を獲得するとともに，経済的には自給自足の確立をめざし，強力に工業化を推進した。しかしこの工業化の行き過ぎ，労働者優遇策はインフレの昂進，農業生産の停滞を招き，ことに1954年成立した離婚法は，教会との対立を招き，遂にローマ法王から破門されるに至り，ペロンは孤立し軍部の革命によりペロン政権が崩壊する。以後18年間軍政３年，民政８年，軍政７年と繰り返えされたが1973年ペロン派が復帰したものの，同年末のオイルショックを契機として，次第に物価上昇し，これに伴って賃上げ要求が行われ，物価と賃金上昇の悪循環が始まり，治安面においても，各地にテロ，ゲリラ活動が激化する傾向となった。この悪化の方向を辿るとき1975年ペロン死亡，副大統領だったペロン夫人が大統領となったが，事態収拾の能力なく1976年，政治的混乱，経済悪化，官政界の汚職腐敗，道義の低下等に加うるにテロ，ゲリラ活動の激化で，無政府状態となり，国民は軍部介入によって局面打開が噂されていたが，1976年３月，今後は軍事評議会が政権を担当する旨の布告が発せられ，平穏裡に軍事革命が行われた。このクーデター以来軍事政権のたらい廻しと，1982年のフォークランド（マルビーナス）紛争で国際的に疎外されていたが，今回民政に復帰し，外交的にも好影響があるだろうとみられている。

ただ300％を超すインフレ，400億ドルの外債，国民が民政復帰を歓迎しているものの，この解決には国民を犠牲にしても，強力な政策を打ち出さねばならず，この難問題に直面することは必至であろう。米英南欧諸国はアルフオンシン大統領就任を歓迎していることは「ご祝儀の意味もあり，債務繰りのべ，新規融資にあまりきびしい条件をつけないのでは」とみている程，国際的地位向上が，経済面でも好影響をもたらすと消息筋ではみている。

とにかくこの国の人口約 2,800万人，大部分はヨーロッパ系人種（主としてスペイン，イタリア系の子孫)97%，原住民との混血0.5%，その他 2.5%,（日系32,000名）で南米では人種的にその比率は特異的である。従って生活様式は西欧的である。ただ農牧国家にかかわらず都市及びその周辺に人口が集中し，農業人口が急激に減少している。土地区分をみても全土2億7千9百万haのうち牧草地49.1%，農耕地10.7%，山林地17.6%，農牧不適地17.6%，（日本の農耕可能地18%）で，ここの人々はアルゼンチンでは，人口の 2倍の牛がいると誇らしげにいう。牛は 5,686万頭，羊 807万頭，豚 347万頭（1982)，まさに重要な輸出

第 4 図　ガウチョ(牧童)この投縄で牛の足にまきつけ捕える

資源であるものの最近のその伸び悩みをかこっている。しかも経済成長率は,1980年－0.7%，1981年－5.9%，1982年－5.7%，インフレとマイナス成長，これも1946年第 2 次ペロン政権発足以来急速な工業政策の推進の反面，農牧業の停滞を招き，産業構造上の歪みを残したことを否めない。

さてアルゼンチンへの日本人の移住は1907年（明治40年）に始まり，第 2 次世界大戦まで 5,400名，戦後 6,000名，昭和29年より国際協力事業団が渡航費の支給を行い，1954—1981年までは 2,541名の移住をみた。現在日系移住者32,043名(8,854戸)，うち沖縄県人は約70%を占める。また全体の80%はブェノスアイレス市及び近郊地区で，その職業は，公館の調査によればクリーニング業42%，花卉栽培18%，一般農牧者 8%，給与所得者14%，その他18%となっている。このクリーニング業の多いのを不思議に思い，土地の人に質してみたが，日本人は律義で清潔，ことに期日までに仕上げてくれる。欧州人はゆったりしていて仲々期日までに仕上げてくれない。彼等は到底日本人の真似はできない。成功している人も多く，ブェノでクリーニング店を訪ねれば大抵日系である。また花卉栽培はほとんどカーネーションで，私がかつて訪ねた県人もいくつものハウスをもち，年中開花が続き，ブェノの市内に送り出している。面積がそう広

第 5 図　カーネーションのハウス栽培

くなかったが経営が保たれると話してくれた。実はアルゼンチンの牧場をみたかったが，時間の制約でそれができなかった。ここにいる私の友人の言によれば，全くの放し飼い，隣との境界も明らかでなく，いわゆる粗放で牛を売るときは，そこで拾ってくると笑っていた。

余談になるが，世界の開発途上国を主とじて，外務省の外廓団体に国際協力事業団がある。南米各国にもある。ここにはアルゼンチン支部があり職員23名，移住関係と技術関係で，日本人，日系人との接触を密にして，アルゼンチン政府とも協力してその発展に資している。私もイラン，タイ，フィリピンで，学術上の調査で色々の世話になったし，一昨年スエーデンの老人福祉の調査や視察にも色々の資料もととのえてもらい今でも感謝している。

以上アルゼンチンの見聞をもとにして，色々の資料をあさりまとめてみた。

### 3. ブラジル

帰国後，ある友人から一通の便があった。「皆さんが，ブラジルにお出でになって，この国の実状を十分見聞されたことと思います。何分にも 1,000億ドルの外債をかかえ，その利子さえ支払いがとどこおっている状態です。政府は何をしているか，一般には知らされず，インフレの上昇，物価の高騰，失業者も30%で，何か手を打たないと先が思いやられます。経済閣僚が数ヵ月かかり各国を歴訪し，借款の懇請して 400億ドル借りられたと報じております。しかし国の財政の暗いかげが消えそうにありません。経済閣僚を全部退陣させなければ，財政の立ち直りができないと大部分の国民が望んでいます。」と。このような深刻さは経済専門家でない私には解らないが，お会いした県出身者からささやかれたことが

第6図　サンパウロ東洋人街

第7図　邂逅　発田晴子さん（私の教え子，農協高岡病院高等看護学院卒）サンパウロ交歓会にて

少なくなかった。国が大きなプロジェクトを組むとき，官僚がリベートを懐に入れるし，高級官僚や財界人は外国銀行に多額の預金をし，それだけでも国内銀行に移せば，外債は優に返せるという話もある。また甚しいことは，閣僚のうちに「1,000億ドルの外債の額は，すでに利子で払っているから，もう返す必要がない」と暴言を吐く者もいるといわれている。さきに私の会ったある大手進出企業の社長は，ここでいくら利益を出しても，規制されていて，それを国外に持ち出せず，設備投資にまわすより仕方がないと嘆いていたのを思い出す。外国よりの輸入品に莫大な関税を課し，例えば街を歩いていても日本製の自動車はほとんど見られず，進出企業のフォルクスワーゲンやファイアットばかりである。国の台所は火の車の感を呈している。

国土は日本の23倍，人口1億2千万人と推定され，白人60%，混血（インデオやアフリカから買われた奴隷の子孫）30%，残りの10%は黒人，黄色人種である。日系人は現在80万，それで〝人種のるつぼ〟といわれている。政府も南米各国の大部分がそうであるように独裁傾向が強く，国会で大統領の政策に反対の決議がなされれば，国会を停止し，大統領の独裁で政治が行われる。時々この措置をもとられたと聞く。

10月16日，ニッケイホテルで県出身者と交流交歓会が開かれ，会場は 200人をこす盛大なもので，1世，2世，3世とお互いに打ちとけるうち，50年余の歴史の流れが，まざまざと顔に刻まれ，苦斗のあとが偲ばれる。

ブラジルといえばコーヒーの代名詞のようになっていることは今も昔も変わらない。しかしこれも19世紀半頃からである。1500年ブラジル発見の頃は，ブラジルスオーといわれる木は染料，薬品などに用いられ，ヨーロッパ市場で珍重にされ，重要輸出品でもあった。しかしこれが下火になると砂糖がその代りに登場し，世界の市場を独占した。これも中南米各国でも栽培されると漸次好況の影が薄くなる。そこで次はゴールド・ラッシュ，金やダイヤモンドなどの貴金属資源の開発となったもののラッシュの期間が永く続かなかった。

この時代が消褪して，コーヒーが登場する。サンパウロ州やリオデジャネイロ州を中心に栽培され，緑の波のように西南方面へ拡大して行ったといわれる。1930年頃世界の総生産量の60—70%を占め，ブラジル輸出額の60—70%はコーヒーであった。ブラジルの生産品種は，単一的で，時代の流れで著しい消長があり，それで世界的恐慌に巻きこまれると，国の経済に及ぼす影響は計り知れない。1940年頃にはコーヒーの価格は½に下がっている。農産物を国の経済の基本においている国の大きな欠点である。第2次大戦中アマゾン流域のゴム生産にわいたが，戦後輸出国の疲弊，混乱，また生産不足に悩み，この国はいち早く生産体制を立て直し，貿易が伸長した。ことに外貨を獲得し，工業化への転換により，約10数年間国民所得が伸長した。しかし工業化の設備投資過大のひずみ，インフレの急進，さらに国際収支の赤字で財政の逼迫に追いこまれた。ことにブラジルの今日の財政の逼迫の要因に二つの問題があった。その一つは石油ショックによる痛烈な打撃である。ブラジルの産業発展は沿岸部に限られている。鉄道も道路も発達はその地域に限定されている。この鉄道も海岸線を遠ざかると極めて貧弱なもので，私はサンパウロから 700km離れたミランドポリス駅附近でみた線路は狭軌で，あたかもトロッコ並み，これでは大量の物資輸送にはたえられず，広大な国土は，トラックによるか，沿岸，アマゾン流域は船舶輸送，しかも石油産出はゼロに等しく，すべて輸入に頼らねばならない。私どもの滞在中，アマゾン河口附近で油田が発見されたと新聞報道でみたが，これは将来にかかる。石油の高騰は輸送のみならず，すべての産業に大打撃を与えた。もう一つの問題は首都の移転である。人口の海岸地区偏在の是正と奥地開拓の目的を有するものであり，建設された首都ブラジリアはジェット機のような形態がとられている。この膨大な計画と建設は財政の悪化に拍車をかけたものといわれている。

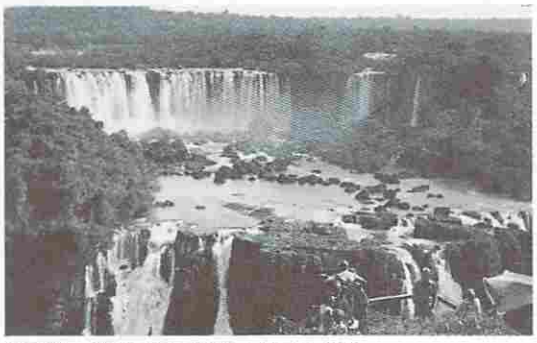
私どもは，サンパウロの交歓会で会った人々は，サンパウロ周辺の人々が多かったように思われるし，また余裕のある人々のよう想像された。しかしこの大都会より遠く離れた奥地，また5千数百キロのアマゾン流域に，近代文化から遠く隔てられた生活のうちに苦斗を続けている県人も少なくなかろう。それを思うとき，それらの人々の幸福を祈らずにはおられなかった。

またブラジルは，未来の国とよく聞かされている。その広大な国土のうち農業用地（耕地，果樹地，牧場，牧草地は26%，森林は68%である。人口は 1億2千6百万人，2000年の推計では 2億1千2百万人と推計されている。年平均人口増加率 1.3%（日本 0.5%），これは1975～80年の国際統計に表われている。ブラジルでは，開拓が進めば7億の人口が養えると豪語している。しかし先日，ある学者が，ブラジルでアマゾンや中央奥地を開発すると，太陽によって貯えられた熱は直ちに放射され，成層圏に温度の変調を来たし，北半球では寒冷や乾燥に見舞われる可能性が十分考えられる。そのため人類の75%の人口を占め，地上食糧の大生産地，供給地の印度，中国，米国，ヨーロッパなどの生態系をくずし，食糧危機の招来をもたらすと警告している。未来とは何時か私にはわからないが，この学者の説をかりれば，ブラジル自体の開拓も，世界的観点に立って，考えてもらいたいものである。

これに関連してもう一つ付け加えたいことがある。森林の恵みをブラジルは忘れている。1966年から75年にアマゾン地区で伐採された森林の38%は，牧場を開くためだったというデータがある。50年から75年まで25年余りで2倍以上の牧場がふえている。それだけ熱帯雨林が減っている。ある場合には森林の空から大量の枯れ葉剤をまいて，そこに火をつけ山は一挙に焼きはらわれる。牧場が完成し，牛は肉を供給していったが，この地域の森林

の生態系は壊滅し，森林に生息する貴重な動植物の種は皆殺しになり，長期的な見地からみればブラジルは大損害を蒙ったことになる。この地域は集中的降雨があるが，この絶えまない雨水を，川や湖に緩かに流して洪水や地滑りを防止している。最近は毎年スイスの3倍の森林が伐られているという。この原因の一つに，さきにも触れたが人口の急激な増加である。燃料や建築材料のため木を必要とする。しかし過度の伐採や家畜の放牧が，森林資源を回復不能なまでに枯渇させる。アフリカ西海岸のコートジボアール大統領ウエフ・ボワニは「人類は月に到達したが，鳥のさえずりや燃やす木を，どのようにしてつくり出すか未だわからない。後になって鳥や木々に思い焦がれるような取り返えしのつかない誤りから，私たちの大切な国を救おう」といっている。このコートジボアールでは今世紀始めまでに森林の70%が消滅してしまっている。

この緑の魔境，アマゾンに培われるブラジルの国土は，先に述べた宇宙気象の生態系，さらに緑か砂漠かの選択が，全地球的観点に立って対策を打ちたてるのが先進国の使命でなかろうか。



第8図　世界最長の瀑布イグアスの流

私はこのような思をのせて，リオ・デ・ジャネイロの空港をあとにして帰国に向けて飛び立った。

### 治安について

ホテルや空港で全員に対するエージェントからの注意は常に「盛り場や繁華街，また空港ではトロンバといわれる〝ひったくり〟〟辻強盗〟などが獲物を狙って横行しておりますので，貴重品や大金は充分注意して下さい。財布は内ポケットへ，ズボンのポケットは一番狙われ易い処です。街は2，3人のグループで歩くこと，また未成年者のズックを履いたものを見たら用心すること，まずトロンバニンニ（少年ひったくり）と思って下さい。相手が日系人とて油断は禁物です。買物の場合カウンターに荷物やカメラを置いたまま店内を物色しないこと。交通は右側通行です。運転手は交通道徳も低いため歩行者自身横断歩道に特に気をつけて下さい」といわれる。

私は昭和52年にも富山県人移住50周年記念南米訪問団に参加したが，金沢大学長として在任中でもあり，サンパウロ大学やその他の研究所を訪ね学術交流を行ったので，治安について関心はなかった。今回出発に先だち県警本部にお願いし，現地の公安委員会に出向き，警察行政の情況について意見交換を行いたいと思ったが，問い合わせの結果，南米には公安委員会の制度はないとの返事で断念せざるをえなかった。

私の訪れたペルー，アルゼンチン，ブラジルはインフレに喘ぎ，失業者は30%に及んでおり，街には浮浪者がそこここにたむろしている。加うるに貧富の隔差はつのる一方，たとえばスラム街を望むと捨てられたトタンや木材を拾い集め僅かに雨露をしのぐような有様，ことに年間降雨量60ミリ足らずのペルーのリマでは屋根のない堀立小屋も散見される。私は好奇心から近よってスラムの住居をカメラに収めようと行きかけると現地の案内人からそこへ入ると身ぐるみはがれ，生命の保証はできないと押し止められた。またサンパウロでえた情報だが，スーパーが屡々集団強盗に襲われる。集団で突如として侵入，店の商品をかっぱらい忽ちのうちに分散逃亡する。警察官が来たときは後の祭，現場で押えない

限り犯人は捕まらない。私が一夜お世話を願った第3アリアンサ（富山県人開拓地）のI氏の話では，娘さんがサンパウロに嫁がしているが，先日街路でネックレスを引きちぎられ，ハンドバッグまで強奪されたと嘆いていた。私ども訪問団でも女性は必ずハンドバッグはこわきの下にはさみ決してぶら下げないことの注意もうなずける。また護身用の銃器の携帯も自由で，取材に同行した記者がブラジルのある都市には一般の射撃訓練所もあり，青少年も射撃練習に励んでいたのに驚いたと私に語ってくれた。そのためか市井には強盗殺人事件も稀ではないらしい。

私どもは旅行中必ずパスポートを携帯している。南米各国では常に身分証明書を携帯せねばならない。（写真入り）警察官に尋問されて所持しないと身分が確認されるまで留置場送りとなる。このことはソ連や東欧諸国でも同様であるが，南米大陸は何れの国境も陸続きでどこからでも入りこめるためもあろうが，政情不安がつのる一方でとくにきびしいと思われる。話は別になるが，ブエノスアイレスで散歩に出たとき，100人近い行列が街角でみられた。これは共産圏でよくみられる買物（食料品）の行列だろうと思ったが，同行の日系の婦人に聞いた所，紛失した身分証明書の再交付のための役所前の行列だそうである。というのは10月31日ここでは大統領選挙があり，身分証明書がないと投票権が行使できない。病気などで医師の診断書がない限り，投票は義務であり，棄権すると罰せられる。選挙直前であり，街角ではスピーカーによる選挙演説，それだけならいいがまきちらすビラは風に舞い，昔から閑静できれいな街と知られているブエノスアイレスはその面影もない。ことに大きなデパートの白壁にスプレーで選挙のスローガンが落書してある。よくも器物汚損で訴えられないものだと思う。日本ではかつて国鉄労組や動労の連中がやっていたが見苦しい。何分にもアルゼンチンは軍政独裁で，

第10図　リマのデモの取締り，街頭に人通りなく警官のみ

私のいたときは大統領権限で国会は停止，議事堂は人の子も居らずカラッポ，軍政より民政への選挙戦たけなわであった。

ついでに選挙について触れてみたい。富山県人集団移住地第3アリアンサはサンパウロ州ミランドポリス市にある。近く市長，副市長，市議会議員の選挙がある。人口3万有余。市議会の議員定数13名，これと大体同じ人口の滑川市20名，黒部市22名でかなり少ない。立候補予定者30数名，また市長立候補10名位とのことである。泡沫候補があるかも知れないが私どもの常識では考えられない。競争激烈なためかどうか知らないが，買収は日常茶飯事であり，買収に対して日本のような厳重な取締りはないもののようで，市民もまた罪悪感はないらしく，土地の人に聞くと数名の候補者から金をもらうのがザラであるという。投票も不可解で，市長，副市長，市議会議員の投票に際して，同じ政党に属するものを投票しないと無効，すなわちA政党に属する市長，議員をならべないとだめ，市長はA政党で，議員がB政党で，この両者を投票すると無効と判定される。何だか参議員議院の比例代表制のような気がする。

さて私の廻った南米各国は，まさに軍事独裁政権といってよい。今世界に独立国家 160ヵ国を越えた。このうち議会制民主主義国家は日本を含めての自由主議国20に満たないだろう。共産圏はとにかく大部分の国々は発展途上国で民度も低く，経済的に自立の力もな

く独裁は止むをえないとも思われる。しかしこの独裁に対して南米では民衆のうちに強い反抗があり，デモが続いている。たまたまペルーのリマでデモに出くわした。日本のように届出制かどうか聞きもらしたが，街路は通行どめ，人の子一人通らず，各処に警察官が散在し，その中央に護送車が待機している。さて私のでくわしたのが学生デモである。日本でみられるジグザグデモや渦巻きデモでなく，先頭に赤旗をもっているが，かなり整然としている。何らか叫びながら前進してくる。

第9図　ブエノスアイレスの建物への落書

そのうち先頭と警官と何か言い会っている。とたん，数名が拘束され護送車に放りこまれる。さらに警察の準備していた放水車からデモ群の頭上に滝の如く水を浴びせる。デモ隊はもちろん，路上も商店も水びたし。ただ商店は予めシャッターは降している。これをみていると，まさにドラマのシナリオ並み。私も放水前に遠ざかり退散というわけ。この時は私どもはショッピングのための外出で，鎧戸を降された店の隙間から店内に入れられ，再びシャッターが降される。そのためデモの終末が見とどけられず残念に思われた。ただ共産圏や中近東のような発砲騒ぎまで起こすようなことはなさそうだが，将来は予測できない。(昭和48年私がイランへ赴いた前年，パーレビ王朝打倒のテヘラン大学生のデモで百数十名が射殺されている)。

このような治安の悪化は経済的動向に連動してくる。1973年末のオイルショックを契機として，次第に物価が上昇，これに伴って賃上げ要求が行われ，物価と賃金上昇の悪循環が始まった。最近でも3―4ヵ月に一回ずつベースアップが続けられている。各国政府は物価の上昇と治安対策に全力を尽しているものの如何に独裁軍事政権といえどもこれを解決することができない。ことに経済開発のため多額の外債をかかえ，ブラジルでは 1,000億ドル，アルゼンチンでは 400億ドル，ペルーでも 110億ドルと膨大な借財をかかえている。これらの国々は鉄道が発達しておらず，物資の輸送は主としてトラックに依存している。そのため石油の需要は輸入に頼らねばならない。ただアルゼンチンは国の南端フエゴ島での油田開発により需要量の80%が産出されるというもののフォークランド紛争で過大な戦費を使用し，敗戦後は対内的にも対外的にも行きづまっていることは事実のようであった。また経済復興のため大きなプロジェクトを組んでいるが，これも外債の増加に拍車をかけている。例えばラプラタ河支流のパラナ河に

第11図　イタイプー水力発電所出力1,200万キロ，世界最大，導水管直径15m，13個，ダム湛水ビワ湖の2倍

第12図　イタイプー発電所の放水路

世界最大の水力発電所を建設している。出力量1,200万キロ，わが関電総発電量に匹敵する。私どもも現地を視察したが未だ完成せず，すでに 100億ドルをついやし，完成までまだ40億ドル必要という話を聞いた。これもすべて外資，この電力をどこに使うのだろうかと私どもの素朴な疑問がささやかれた。南米は21世紀の国といわれているが，この政情不安が続く限り，このような外資による過大投資は開発に対して道遠しの感をいだかせた。

次に交通関係について述べてみよう。国際統計を拾ってみると，ペルーに関するものが記載されていないが，乗用車商用者合せてアルゼンチン 402万台，ブラジル 1,016万台，日本 3,753万台，人口 1,000人当りアルゼンチン67.7台，ブラジル85.3台，日本 322.9台，また道路1キロ当りの台数は，アルゼンチン17.8台，ブラジル 7.7台，日本34.0台（1980年），これは国土の広狭，道路の総延長キロ数によりそれぞれ異ると思われるが，何分にも道路巾が広く，時速90キロで走っており，車の停滞は先ず経験しなかった。出発前から車優先と注意されていたが，交通信号は赤青の2色，黄色の注意信号はない。大都市においては道路の中央にポリスボックスがあり，警察官による手信号も加えられている。それでも現地の人々は信号は赤でも車さえ来ねば平気で横断している。車の数は少ないとはいえ，県出身者との会合で，県人のうちでも最近2，3の交通事故犠牲者があり，その家族から痛ましい話を聞かされた。現地人の交通道徳の欠除から事故の発生はかなり多いものらしい。また事故当事者はお互いに話し会いをして決着をつけ，警察の関与することは少ないという。交通機関は，ブエノスアイレス，サンパウロ，リオ・デ・ジャネイロには地下鉄があるが，他はすべてバス，私どもの使用したバスは観光用でデラックスのものであり，ことに寝台バスなどは日本で見たこともない申し分のないものであった。ただし市内バスは全く骨董的価値はあるかも知れないが，車体は凹み放だい，塗装もしないで赤錆だらけ，その型も日本では20—30年前を彷彿させる。何分にもどれだけ乗っても1回20円前後，乗客は文句もいえない。乗用車にしても日本ではスクラップになるような代物，どこでぶっつけたかバンパーやボンネットは凹むにまかせ，塗装もはげたまま，なかには一方のヘッドライトがつぶれているものも平気で走っている。恐らく車検もないのであろうが，交通事故に対して空恐しい気がする。また道路に奇妙なものをみた。それは国道では見られなかったが，それより分岐する県市町道などで道路を横断して巾30センチ，高さ15センチ位の隆起がある。日本では中央分離帯にあるようなものでコンクリートで作られている。車が高速で走ってくれば恐らくもんどりうってひっくり返ることは必然であろう。余りにも不思議でガイドに質すと，これは警察署，教会，学校の前，また急なカーブの危険個所にある。一旦停止しないとひっくり返える仕掛けになっている。これも交通マナーの欠除か。

第13図　オンボロ車

もう一つ私の関心のあったのは麻薬や覚醒剤のことである。覚醒剤については取締まられているものの警察の網の目が荒いのか，常用者が多いらしい。大麻などは対象外。ただ興味深いのはコカインである。アンデスの高原の貧しい原住民たちはコカの葉を年中噛んでおり，これは胃の神経を麻痺させ空腹感をしのんでいると今でも伝えられている。このコカの木はペルー，ボリビアの原産で，16世

紀スペイン人が南アメリカに侵入したときインカ民族が，この葉を噛んで疲労および渇をいやし，また宗教上の儀式に用いたのを発見，その後これを研究し，優秀な局所麻酔剤としてのコカインが含有されていることがわかった。私も終戦まで，専門である耳鼻咽喉科の手術に局所麻酔剤として使用，その効果の著しいことを経験している。しかしモルヒネと同様慢性中毒になりやすく，また現在のような麻薬取締法のような厳重なものはなかったので，とくに医師仲間に比較的多かった。慢性の常用者は，この使用により幸福感や楽天感，性欲高進などがえられた。サンパウロである人から聞いたが，アマゾンの上流コロンビア国境附近の密林中に自生または栽培されており，コカの葉から抽出したコカインを堂々と市場で取引している。しかし交通もままならぬアマゾンの奥地の広汎な地域で，取締りのしようもなく，南米の市井に流れる各種麻薬の浸透と世界各国への密輸の根原はアマゾン上流の密林だろうと話してくれた。

また警察制度であるが，南米では州，市町に自治体警察の形で治安を守っている。しかし国民の平穏を保つために旺盛な責任感や果敢な行動がみられないような気がする。日本では第二次大戦後警察制度改革の一環として，昭和22年，地方自治の真義を推進するため警察管理機関として公安委員会の機構を設けた。これは旧警察の官僚性の排除と政治的中立性を確保するためとされている。自治体警察を管理するものとして市町村公安委員会があった。しかし市町村自治体警察が弱体，非能率で，また市町村財政の過度の負担があるという批判が大きく，アメリカの占領終了後，昭和29年現行の警察法が制定された。現在国家公安委員のもとにある警察庁を中核として都道府県警察が連繋を保ち，広域的に全国の治安確保に任じている。南米における地方自治体は，それぞれの単一自治体の範囲に止るところが多く，国全体としての治安の確保に欠ける所が多いのでなかろうか。ただブラジルではPolicei Miltar というものがある。すなわち陸軍警察，かつての憲兵であろう。これは軍部の統率のもとに本当の安定秩序を守る役目と思う。私どもが国道を走ると，約 150－200キロ毎に検問所があり，運転手を尋問していた。一般警察官とちがいライフルを所持している。なお南米各地は警察官の撮影が禁止されている。またつい最近アルゼンチンではベースアップを要求して警察官のストライキが行われたが，内務大臣の斡旋により中止されたという話も聞く。

私は数多くの国々を廻り，わが国程治安の確保されているところはない。今度旅行を共にした皆さんも口々にいっていた。夜安心して一人歩きできる所はどこにもなかった。これも日夜を分たず職務に精励する日本の警察官によって得られたものであり，私は誇と思っている。ついでに附記したいのは，先進諸国の警察官一人当りの負担人口であるが，フランス 278人，西ドイツ 318人，イタリア340人，アメリカ 394人，イギリス 398人，これに対して日本は 551名である。すなわち少数精鋭で国民の信頼を得ている。海外の治安状況をみるにつけその労苦を多とするものの，国の平穏を守るためにも，さらに警察の活動力の充実を期待して止まない。

以上，断片的な雑薄な見聞であり，短時日で正鵠をえていないかも知れないが，今回の南米渡航で，私の特に留意していた事項である。

### クスコにて

リマから飛び立ったジェット機は，雲間に白銀のアンデス山系を眺めながら約1時間でクスコに着く。クスコは 3,400mの高地で酸素が稀薄だから，2，3時間ホテルで休養，身体を馴らしてインカの廃墟にバスを走らす。インカ帝国の古都クスコは石畳の道路，カトリックの大寺院やスペイン領有当時と思われる石造の建物が，市内の中央部に散見せられ

第14図　アンデスを越える

る。市街地をはずれて，20分位山裾を蛇行しながら遺跡に到る。標高は市街より 300m位あろう。その遙か下にクスコの街が展開されるが，今通ってきたホテルや寺院などのみがめだちほとんど平屋建の家並が望まれる。インデオの住いは1家族に1軒，長方形の平屋建で，粗雑な石壁か土壁，窓を作らず竈（ガン—信仰する神をおく壇）を設けている。床は土を踏み固めたもので屋根は草ぶきのもの

第15図　インディオの住居(前の電柱は通信線)

が多い。内部の家具は，壇上に作られた寝台，粉ひき用の石臼，上製の火鉢，獣の毛皮で作ったマット位である。村落では未だ電燈が入っていない。彼等の宗教生活には，最も象徴されるのは太陽の子孫であると自称していることである。人間の生活は日の出より日の入りまでという考えをもっているのかも知れない。私はかつてイランの砂漠の奥地の部落を歩いたことがある。ここでも電燈もランプもない。僅かに燈明のようなものに明りを求めて，人間の生活は自然の光のみというイスラム世界を思い出す。

さてこのクスコは，アンデスのふところにかこまれた盆地にあり，ここでは山裾がなだらかである。ふとみると，3，4両編成の汽動車がはい上がってくる。山肌を刻んで，スイッチ・バックを数回繰り返えしながら，喘ぎに似たような動きで山の彼方へ消える。これはペルーの南端モエンドからアンデスの隙間を求めて縫いながらチチカカ湖を経てクスコへ，ここからマチュピクチェに至る約 1,000 kmに及ぶ高山鉄道である。標高0mより4,000mに近くまでのぼる。マチュピクチュはインカ帝国の秘密の首都として栄え1911年に発見された場所である。ここまで幾百のスイッチバックに喘ぎながら20数時間を費して到達するものであろう。「高い山にはい登ろう，山に登れば悲しみが消えるだろう，登って登って，もう，雲にとどきそう」というインデオの哀歌が神々の山なみにこだまして聞えてきそうな気がする。もう一つ附け加えるならば山の果てのある町で「今日は珍らしく定期に汽車が入ってきた」と不思議がっていたが，それは前日到着予定のものであったという笑えぬ話も聞いた。

アンデス山塊中部のインカ帝国は，その文化と権力は，1534年スペインのフランシスコ・ピサロによって征服され，踏みにじられ，はかり知れない衝撃によって，以後再びもとの姿にもどれなかった。かつてのインカ帝国社会は，余剰収獲を生む農業力を背景に富める社会であった。どの溪谷も谷底から高い尾根まで一面に段々畑で覆われ，高い生産力を示した。峨々たるアンデスの雪は自然の恵みとして，谷間をうるおし，種々の作物の生育は，数々の品種を生み，ことにジャガイモの原種はここに生まれている。山間の畑の肥料にするグアノは，海岸地方からラマの背に積んで運ばれ，ここに生産される作物は必要以上に収獲され，そのため専門の仕事につく人間もあらわれ，金銀細工や織工，あるいは行政専門家も数多く出てきたと伝えられる。

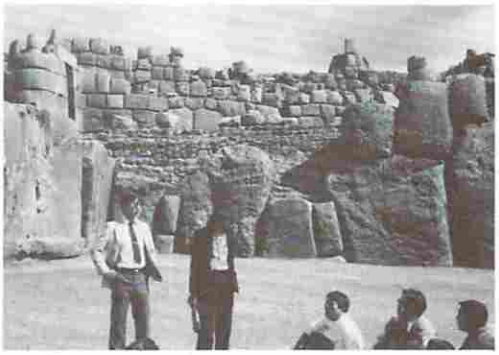
インカ支配下の人々の生活は，過酷であっ

たが安定していた。平民の収獲の⅔は強制的に供出され，兵役につき，公共建物の建築に労力を提供した。クスコの街は整然と真すぐな街路で仕切られ，神殿や宮殿も築かれたわけである。

インカ初代の王は1200年頃と推定される。その第９代の王（1438—71）のとき完成され，クスコを中心として発展したが，15世紀半ばより版図が拡大し，北はコロンビアより南はアルゼンチンに達し，インカ帝国の最盛期が続いた。そと滅亡は1532年フランシスコ・ピサロに率いられるスペイン軍侵入により，アタワルパ王が捕えられ，身代金を取られたうえ，処刑されたという悲劇によって終末を告げた。

この最盛期の物質文化は，その遺跡，遺物，都市構造形態によってうかがえる。また土器の形，建造物の形式，織物の文様などに特徴が発揮されている。インカの土器は巧みな作りで，黒白赤黄オレンジなど色々の文様を現わした多彩土器であり，主として幾何学文様を用い，そのなかに小さな形式化した蝶，蜂また哺乳動物の文様がある。金属製品も重要な遺物で，日常生活の必需品と装飾品は，当時金細工が如何に優秀であったかが証明される。その他木工品，石工品には農耕工具として工夫をこらしてある。リマの天野博物館に所蔵展示され，色々と説明を受けたが，かつてのインカ帝国最盛期のあとを探るよすがとなったことは事実である。

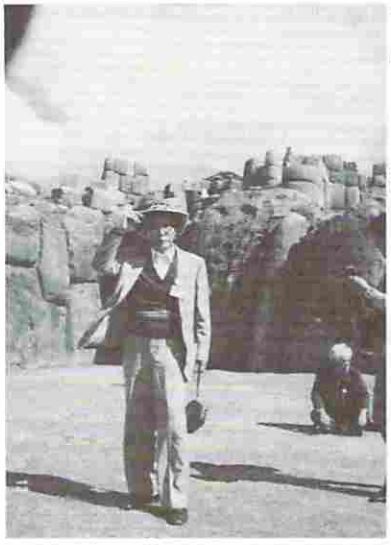
インカの遺跡は，盆地を足下に見おろす丘陵地帯にひろがる。残されたものは城壁のみ，巨大な多角形の石塊を磨き，カミソリも差し入れないようにぴったり組合せ，モルタルも使われていない。石の面を平たくしたもの，あるいは軽くふくらみをもつものなどそれぞれのやり方がみられる。しかも鉄を知らず，青銅器具もなかった時代の石工が石できり出し，石で滑らかに細工したものであろうが，ひとりの人間がこれだけ磨くとすれば，それ



第16図　インカ遺跡

だけでも何年かかったかわからない。かつてはこの城壁の上に宗教的建築，行政庁，宮殿などがいらかを競っていただろう。またこの石の積み上げ方は，それぞれの建築の目的に従って行われたもので，時代の差でないだろうと考古学者もいっている。しかも建築家が粘土でひな型を作り，建物の設計をしたと伝えられている。

スペイン人は，侵入とともに神殿や宮殿などの建物を破壊したが，過去７世紀にわたり数多くの地震の強襲にさらされながら，私どもの眼に，城壁の巨大な姿をさらしていることは全く驚異に価する。しかも10～15m立方位と思われるこの巨石が，どこからどうして運ばれたか，この謎は未だ解けないと案内の人が説明してくれた。



第17図　インカ遺跡にて

何分にもインカ人は言葉を書き記るすことを知らなかったことがよくいわれる。彼ら程知的に傑出した民族が読み書きとは無関係であったことは矛盾した感がする。文字を知れば疫病，迷信，邪悪のもとになると固く信じていた皇帝もいたと伝説も残っており，征服した土地で，次々学校を開いたが，教材といえば「ギプ」で，つまり数を記録したり，複雑な計算もできる結縄だけだった。広大な地域にわたるアンデス山中の盆地に数多くの遺跡があるが，まだ密林のなかに千古の秘密を包んで，数知れず残っているかも知れない。1911年，インカの秘密の首都として1572年まで栄えたマチュピチュの遺跡のように。

私どもは，この盆地に散在するいくつかの遺跡を廻った。3,800mの高地にある皇帝の水浴の場に案内された。こんこんと湧き出る清冽な水，一きくの水はのどをうるおし，生水は絶対に呑むなといわれたものの，ここだけは南米旅行中の例外中の例外だった。

この日，私どものグループの他にも，10数台のバスが観光に訪れていた。英語で話していたから欧米人であろう。年間数十万，数百万かも知れない。かつては太陽の子孫として素朴だったケチュア族は，現代社会の世相にさらされて，観光資源を大きな生活の糧とする彼等の文明社会への転換が色々の点でうかがえた。

### 羊頭をかかげて狗肉を売る

クスコ空港での私どものバスの周りに，インデオの女たちが土産品の織物をかかえてまとわりつく。私はメキシコ，アルゼンチン，ブラジルを廻ったことがあるが，こうまじまじと近くにインデオに接した記憶がない。風貌はアジアモンゴル系，アメリカインデアンと等しく３万５千年から２万年前シベリアとベーリング海峡が陸続きであったとき，アメリカ大陸に渡り，漸次大陸を南下９千年前に南米大陸の南端に達したものといわれている。

ホテルに入るときも，玄関前でも10数人のインデオが，私どもを待ちかまえている。手織のゆったりしたスカート，幾何学模様の手編みのショールを肩にはおって，銀の大きなピンで止めている。フェルトの帽子を平たい鍋をのせたように釣合いをとりながらかぶっている。また派手な模様を織りこんだポンチョを肩からたらしている。懐が暖かいとみられている日本人をねらったのだろう。ねらわれた私どもゾロゾロ玄関へ出て彼女らと渡り合う。もちろんスペイン語も，ケチュア語も判らない。しかし手真似でも結構通ずるらしい。帽子，セーター，帯ひもなど，インカ時代の文様が極彩式で織り込まれ，ことにセーターにはラマの模様が浮き出され，日本への土産には恰好のもののように思われる。いくらだといえば，１枚10ドルというらしい。両手をひらげて値段をいう。２枚買うから15ドルにしておけ。指１本だして，片手をひろげる。相手はベチャベチャいいながら首を振る。彼女の「ノー」である。結局指１本に，片手と指２本17ドルに負けさせた。インデオ手製のセーター２枚で，つまり１枚 2,000円位，それにインカ風の帽子，腰おびを求める。遺跡めぐりには，このセーターを着，腰帯をつけ，帽子を頭に乗せ，安い買物をしたと意気揚々と出かけた。

第18図　ホテル前にて土産物を買わされる

インデオの住居の附近は，畑いっぱいじゅたんなどの敷物，衣類，帯，毛皮などをひろげ，

インデオの女達は，毛から糸をつむぎ，機にかけて編物を編んでいる。そのかたわらにラマやアルパカなどが，十数頭のんびりと草をはんでいる。私はそれらを動物園でもみた記憶もなく，そこにいる動物から製品までの縮図に見とれながら，昨日求めたわがまとわりを見直す。

第19図　ラマの前の土産売場

さて，そこで後日譚がある。帰国してから遊びに来た嫁に，これを見せびらかし，「どうだ。安い買物で，インカの毛織の特徴がでている」自慢話に話をはづませようとするとたん，「お父さん，これは化繊ですよ」という。「どうしてわかるか」「糸が光っていますよ。その糸を焼いてごらんなさい」糸を焼けばニオイがでる。早速むしって火をつけたが，動物性特有のニオイがでない。嫁は，羊毛やまゆから糸を紬ぎ，機を織っているので一眼でわかったのだろう。国に帰って始めて偽物をつかまされたのが判った。大体 2,000円足らずでラマやアルパカのセーターが買える筈がないと安い買物に飛びついたのが後の祭。しかもラマやアルパカの現物をかたわらにおいて編んでいるから，日本人なら誰でも信用するだろう。

ここのインデオはケチア族という。インデオの部族は人類学的に約50，少ないものは100人以下，最大はこのケチア族で約 300万。インカ帝国時代の後えいであるが，多くはアンデスの東部，アマゾンの上流に住み，瘴癘の密林中にあるため，疾病にかかる率も高く，減少してゆくといわれているし，経済的に恵れず貧困で限られた土地で農耕をして生命をつないでいる。収入といえば，前に述べた観光客相手の土産物位である。クスコ周辺の人口の80%はインデオかメスチソ（インデオとヨーロッパ人の混血）である。ここで職を離れれば都会地へ出てゆく。しかもリマでみられたスラム街では大部分インデオといわれている。淳朴な原住民といったインデオを頭に画いていたが，観光客に全くすれているインデオは都会地の土産物屋の店先きと同様であることが思い知らされた。

「羊頭(ラマ頭)をかかげられて，狗肉を買わされる」お粗末な一席。

それでも大学にいる孫は，この帽子をかぶり，セーターを着て，渓流に岩場を求めて飛び歩いている。

### 第3アリアンサ

昭和52年，富山県移住50周年記念に南米を訪ねたことがあるが，当時金沢大学長在任中で，学術交流の名目で海外出張が許可されていたので，サンパウロ大学やその他の研究所，また学術上の調査もあり，開拓地を見聞することができなかった。

今度は全くフリーで，富山県からの移住者の血と汗で開拓された第3アリアンサをこの眼で確めるのが，主な目的の一つであった。

そもそも日本人の第1回の集団移住は1908年（明治41年）168家族781名が，笠戸丸で海路印度洋より喜望峰を経て大西洋に出て，50日の航海でサントス港へ6月18日に到着したのを以って始まる。のちにこの日を「移民の日」として記念祝典を催すようになった。ただこれらの人々は，資金の関係もあり，土地を買うこともできず，僅かの例外を除けば，すべてコーヒー耕地の契約労働者として地主との小作契約によって労働に従事した。これはコロノと称するもので，コロノ生活は，抱

いてきた夢とはひどくかけ離れたもので，その苦難は筆紙に尽しがたいものであったと伝えられる。

ところが1920年頃から第１次大戦後の不況，それとともに日本国内の資本も労働力も価値を失い始め恐慌の一途を辿りつつあった。また地主と小作との経済的隔差が著しく農民の生活はもはや耐えうる限度を越したため，海外への移民の指向を求めざるをえなかったものと思われる。日本政府は1924年(大正13年)ブラジル移民の旅費負担をなし，その促進をはかるに至った。

これより先1905年，杉村公使が「南米ブラジルサンパウロ州移民状況視察書」のなかに「今や伊国移民禁止のためサンパウロ州は，移民不足を感ずること切にして，官民は一般労働者を歓迎する時機なるをもって，本邦移民の禁止さるる米国に行くよりも，寧ち当州に来ることは我が移民一般のため便利とするところなるべし。幸いにサンパウロ州政府は，その渡航費の全部または一部を償給するが故に，これ又苦慮するに足らず，我が移民のため当サンパウロ州の如きは，実に天与の楽郷福土にあらざるか云々」。この杉村公使の呼びかけが第１回移民につながるものと思われる。

富山県において海外発展運動は白上祐吉知事（大正15年２月―昭和２年５月在任）により提唱され，県内有志により海外移民協会が設立されたのである。その当時の機関紙「ありあんさ」の記録を摘記すれば，次のように述べられている。

**アリアンサ移住地梗概**

1. 位置はサンパウロより西北コトペロ駅まで 770km，この駅から東北へ約20kmで馬車道で通ずる。これも近くミランダ氏が自費で自動車道とする。
2. 標高約 400m，多少の結霜があるが，大体にコーヒーの耕作が可能である。
3. 耕作は緩慢な波状地である。
4. 淡朱色の壌土で，一部は灰色，肥沃にして，５年位無肥料で米作可能である。
5. 耕作はコーヒー，米，綿，豆，トウモロコシ，甘蔗，果樹，蔬菜，その他一切の作物ができる。
6. 水流は少ないが，各所に小流があるのみならず，井戸を掘れば清冽な飲料水がえられる。
7. 地相は全部千古斧鉞を入れざる森林である。
8. 土地は故シュミット氏の所有で上院議員ミランダ氏が全権をもって売却するもので地権は確実である。
9. 売価はアルケールス（約25町歩）を１地区とし，当分 1,750円，出来るだけ一時払とし，止むをえざれば，年賦払とする。
10. 風土病は，多少のチフス，アミーバ赤痢・フェリーダブラボ等はあるが，大体に於て健康地である。
11. 移住地中心よりコトペロ駅まで約24km，新設せらるべきミランドポリス駅まで約16kmである。

25町歩処理の標準

移住地25町歩，１戸分の土地を如何に処理すべきかというと労働に耐えうる人員の多少，地形により千差万別であるが普通３人家族を標準とすると

1. 約10町歩，コーヒー園約 7,000本を植え付ける。
2. 約２町５反歩，牛，馬，豚，鶏等の牧場とする。
3. 約５町歩，綿花，甘庶，米，トウモロコシ，その他の雑作地。
4. ７町５反歩は原始林のまま残す。

ブラジルでは，普通１人のコーヒー耕作面積は2,000株とされる。7,000本では３人の労力を要し，コーヒー耕作の余力をもって他の耕作ができる。

25町歩の自作移住者

アリアンサ移住地の土地25町歩を購入し，自ら耕作する目的を以って渡航するものの必要経費は最少限次の如くになるが，時にこれ以上の費用を要するかも知れない。それで資金はなるべく豊富なるを望む。

| | | |
|---|---|---|
| 1. | 土地代金 | 1,750円 |
| 2. | 支度金 | 500円 |
| 3. | 乗船迄の諸費 | 150円 |
| 4. | 船賃及船中諸費 | 750円 |
| 5. | 上陸より移住地までの諸費 | 150円 |
| 6. | 山伐り代金（2町5反） | 100円 |
| 7. | 小屋掛，井戸堀代金 | 350円 |
| 8. | 種子及器具代 | 100円 |
| 9. | 生活費8ヵ月分 | 350円 |
| 10. | 予備費 | 100円 |
| | 合　計 | 4,100円 |

アリアンサで25町歩の土地を有し，ここの地に山伐り小屋掛けして，1回の収獲をうるまでに4,100円の資金を要する。（なお大正15年標準価格米10kg 3円20銭，昭和59年1月3,550円，約1,000倍，勤労者給与約3,000倍，米を基準とすれば410万円となる。）

さてこれらの金を準備し，渡航，約4年間，まずいものを食い，破れた衣服をまとい，堀立小屋に寝て，文字通りの悪戦苦斗すればコーヒーが小さい可愛い花が咲き，その収獲がえられるようになる。そして25町歩の土地にコーヒーが7,000株と小屋と井戸があれば，現在の所1万2—3千円であり，昭和2年から着手して4年後の昭和6年には少なくとも2万5千円の価格になる（ブラジルでは1年少なくとも2—3割地価が騰貴している），労働賃金を含め1ヵ年の利益は少なくとも2,000円，多ければ4,000円内外をうることになる。

なお，その他日本在住者のアリアンサの土地への投資，海外協会で6年契約で小作人を世話してもらって，その土地を管理した場合，2,860円投資して，6年間で3万円となり，以後毎年3,000円の純益がえられる。その他コロノとして渡航し，契約労働者となり，小作人として働き，貯蓄して土地を買い自作農にもなりうるとしている。

以上は富山県人移住の前年位に，県海外移住協会から，移住奨励のため配布された文書の一部である。

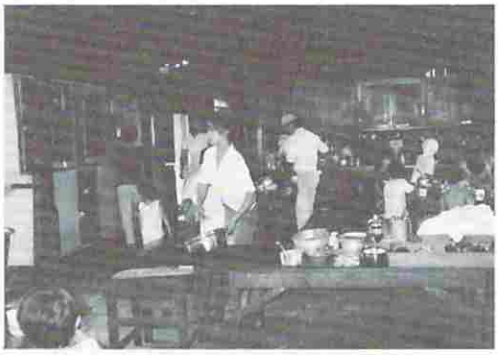
さて富山県の移住は，1908年笠戸丸による第1回集団移住より遅れること20年，昭和2年，福野農学校教諭松沢謙二氏に率えられ，4家族がアリアンサに入植したのが矯矢である。もちろん原始密林で，未だ斧鉞の跡もない瘴癘の地に天幕を張り，人もよせつけない密林に斧をもって挑み，その苦斗は言語に絶するものがあったろう。しかし其の後県内よりの移住も増加し，昭和12年150家族となり，これが最高であった。何故移住せねばならなかったか，これは先に述べたように農村の窮乏が最大の原因であったと思われる。

さて私どもは，10月18日，夜行寝台バスにてサンパウロ市を出発，約800kmのミランドポリス市に早朝到着。このミランドポリス市は人口約3万，高岡市と姉妹都市。この地の名称は恐らく，開拓に尽粋されたミランド氏に由来するものでなかろうか。この地に日南アルミ工場（高岡市荒井三郎氏創設）があり，ここで第3アリアンサの県人多数の出迎えを受け朝食の接待を受ける。この工場は，アルミの鋳造で，鍋，釜その他家庭用具を製造，一時は100人の工員があったが，需要の低下のため10人位に縮小したこともあるものの，最近は業績があがり，土着のブラジル人を使用，50人位が働いていた。

工場見学後，ユバ農場に案内される。ここは第2アリアンサにあり，兵庫県の集団移住地といわれる。そのなかに大正15年，長野県から当時19才の弓場勇氏が南米の一角に新しい文化の創造と土地とともに生きる喜びを求めて，100人余の人々と移住してきた所である。

見わたすと地平線までひろがる大地。それが空まで続く，夜はそこからわいた星がちりばむ。真の開拓芸術である。彼等は生涯ブラジルの土になった。こどもは，赤い土地の上をはい，転りまわる。それで土地の暖さと安らぎをおぼえて育つ。つの笛で村人が食堂に集まる。

この農場は，ソ連のコルフォーズや東欧の組合農場のような経営で，農産物の収穫収入は人頭割で分配する。個人の土地は認めず，作業場の前に並ぶ大型農業機械も共同使用，食事も共同炊事で，全員食堂で食事する。共



第20図　弓場農場共同炊事食堂

産圏での組合農場では，ある面積は個人所有となり，その収穫は個人所得になるがここはちがう。私の見たソ連のソフォースや東欧の国営農場は，すべて俸給制度（月約６万円）でこれとも趣がちがう。

私どもは出発前，このユバ農場でバレー団の演出がみられると聞いていた。一行は約２時間にわたり，大集会場のステージにバレーを参観することができた。このバレー団の誕生は約20年前で，長野県から入植してきた彫刻家夫妻の指導によるnon stop dance で，農業の余暇，週２回レッスンを続けている。私どものためのバレーのうち最後に演出されたものは，密林の開墾からの苦斗と収穫の喜びをあらわす一連の表現で，ステージにあるものは老若男女を問わず，渾然となって，私どもの心のうちに何かをえぐり抜くすばらしいもので，今でも印象を残している。このバレー団は1981年，日本へも演出旅行したそうである。

第21図　開拓の祖
松沢謙二氏の墓標

ここより約20kmにある第３アリアンサに向う途中，開拓の祖松沢謙二氏の墓前に花環を捧げ哀悼の微意を表した。この小高い丘から遠望するに，眼のとどく限り開拓地であり，60年の歳月の流れは，全く原始林の片影すら見出し難く，太陽は耕作地の彼方より昇り，耕作地の西に没する感がある。なお松沢氏夫人は富山県の小学校で教鞭をとられ，夫君ととも現地に移住され，第３アリアンサ移住者の子弟の教育に当り，とくに音楽が堪能と聞く。齢80才を越えられたが，今なおかくしゃくとして，私どもと快よく話かけられた。

私は一夜，宇奈月町出身の市川伊一氏宅に野崎宇奈月町長と共に厄介になった。そして入植以来40数年の苦難の道を承った。当時県出身の入植はあったものの，購入した土地は，幾百年もの樹令を数える原始密林，そのなかは人跡未踏，錯綜した樹木は斧にて打ち倒し，さらにひ力にてはびこる巨大な樹根を掘り起こし，全くの焼畑農業で，両親と氏夫婦の全

第22図　第３アリアンサ開墾地

員一致の苦難の継続であった。食糧確保のためマンジョカ（芋の一種），湿田には水稲，さらに収入をうるため野菜，コーヒーなど，試行錯誤を繰り返えしつつ漸く安定されているようであった。家屋もかなり広く，いくつもの部屋があったが，この建物もほとんど自らの工作で建てられたもので，この地を切り払った樹木によったものだそうである。

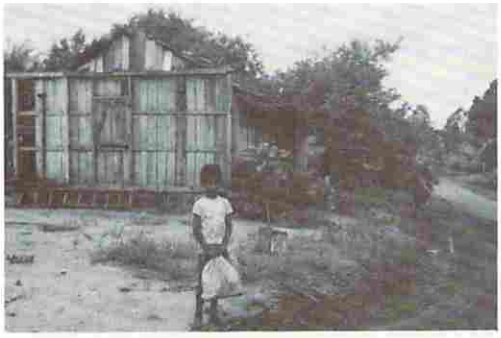
今第３アリアンサでは60戸余りの農家があり，平均耕作地 1,200ha，市川氏は 1,500ha を所有している。県出身者は現在24戸，他は他府県出身者で，かつて 150戸もあったが，農地から離散し，都市や他地区に転出，種々の職業に従事しているらしいが，消息不明のものが多い。このアリアンサはミランドポリス市のうちにあり，隣の家といっても５kmや10kmはざらで，所によっては20kmも離れている。集落農村を見なれている私どもの感覚に全くそぐわない。ここはミランドポリス市の管轄にあり，人口３万余の同市の面積は富山県位あるのでなかろうかとも思われる。

この地の農場は現在，多角経営である。かつては単一品種の栽培，例えばコーヒーにその主力を注いだが，生産過剰によって価格の変動が著しく窮乏に瀕したこともあり，また10年前，降霜により全滅した経験もあり，現在主なものは畜産で，肉牛の放牧である。ここでは粗放と称しているが，牧草に依存し，濃厚飼料はほとんど与えず，自分の牧場に何十頭，何百頭いるかわからないものもあるという。市川氏も昨年は自然交配で放ってある牛の出産で20頭も増えていたといっていた。私は県出身の人々との交歓会を終え夜に帰る途中，道路に数頭の牛が寝そべっているのに驚かされた。これをおっ払って車を通す仕末。この地の牛はインド種で，首の背にコブのあるのが特徴でわが国では余りみられない。この肉牛は冷凍されヨーロッパに輸出される。日本では一頭50万―100万円するが，ここでは６万円位。ただし日本のような高級牛肉ではなく，南米ではハンバーグ用の牛が飼育されているということも聞く。この広大な土地の大体70％は牧場で，ここではヨーロッパにみられる三圃式農業の形態をとっているようにみうけられた。すなわち農地を三等分し，⅓ずつ３年間に一度ずつ牧草を作り，他の⅔は種子を蒔かず休耕とし肥料を与え地味を豊かにする。これはヨーロッパでは中世紀から続き，私のみたフランス，ドイツなどで今尚その耕法の残っている所もある。

果樹は，マンゴー，パパイヤ，メロン，西瓜，パイナップルなど，食糧としての小麦，陸稲，コーヒー，さらに甘蔗（サトウキビ），これは主としてアルコールの原料にするが，ブラジルでは石油開発が進みつつあるものの需要に遠く及ばず，自動車の燃料の80％はアルコールに依存しているため甘蔗の増産を奨励している。陸稲は８―12月の間に種子をまき，そのため収穫のづれがある。１アルケールス（約25町歩）に 120俵とれる。水稲はバラまきで水田に入らない。乾期に収穫する。その他養鶏も盛んで所々大きな鶏舎もみられる。各種野菜も栽培されサンパウロの供給基地の一つともいえる。また最近ゴムの栽培が行われ，私のみたものは苗木程度のものである。第２次大戦中，アマゾン流域の密林中の自生樹からのゴム産出景気にわき，多大の外貨を獲得し，またそのため栽培もされたといわれるが，天然ゴムに代る合成化学によるゴムのある今日，今その苗木を育てることに多大の疑問をいだいたのは私のみではなかった。

市川氏はすでに夫人を亡い，80才を越える老母と２人世帯である。11人の子女を有したが，娘さんは嫁ぎ，男のお子さんは，サンパウロの大学を卒業して家へは帰らず，ただ９月三男が結婚し，漸くアリアンサに帰り，農業に従事するということで一安心の様子であった。しかし 1,500haの農場をどうして経営してゆくか尋ねると，小作人をやとっているという。それはポルトガル人，イタリア人，それにア

フリカから売られてきた黒人奴隷の子孫が多い。それらに対して耕作地からの収入の50%を給料として与えるとのことである。何分にも失業率30%のブラジルではいくらでも人をやとい入れることができるらしい。



第23図　小作人の住居

第24図　アリアンサの小作人のつるべ井戸

とにかく25haの割り当てられた土地に入植し，今平均 1,200haの耕地牧場を有する。時の流れとともに財をなしたものは離農し，近接都市あるいはサンパウロなどに転出，その土地を譲り受けたため残留者の土地の拡大となったものであろう。しかし私どもの感じたことは文化に恵まれないことである。電燈にしても市川氏宅は昭和42年に始めて引きこめた。そのため引きこみの電柱は利用者負担である。電柱は不揃いで枝も十分切りとられないものも所々見られる。サンパウロ市には日系の人々は30万人位といわれ，今では２世，３世の時代と思われるが，一世は恐らく開拓の人々であったろう。市川氏の家庭をみてもその感を深くした。

なお私は公民館で行われた県人交歓会で，日系として招待されていた千葉県出身の83才の老薬剤師が話しかけてきた。この人は開墾当時よりこの地区に住み，医療を担当していたという。ブラジルの医師数は歯科医を含め62,743名（1974），医師一人当り人口 1,647名，日本のそれは医師 154,578名（1980），医師１人当り人口 757名である。しかも国土は23倍，そのためか都市以外の過疎の地は，薬剤師，保健婦，看護婦，鍼灸師の医療従事が認められている。医師は都市に集中しているのでこのような措置をとらざるをえない。この老薬剤師の50年間の過去の思い出として，開墾当時熱帯特有の伝染病，黄熱病（ウィルスによって起こり，蚊により伝染し，肝臓をおかされ黒色のものを嘔吐，高熱を発し，黄疸を起こす。死亡率は高く，野口英世博士はこの研究中斃れている），マラリヤ，赤痢，とくにアメーバ赤痢，それに密林中の毒蛇，毒グモ，サソリなどの有害虫，さらに原虫微生物による皮膚疾患で多数人命が失われた。またフイラリヤによる象皮病もよくあったという。その他熱帯潰瘍も原始密林の開拓中に多発し，苛酷な労働と風土の激変，栄養不良と重なり，衛生状態の劣悪は眼をおおうばかりだったと語ってくれた。しかし今は40km離れているミランドポリス市内には病院もあり，現代医学の恩恵にも浴しうる時代となり，私どもの会った人々は，それぞれ広大な土地を有し，一応豊かとまではいえないまでも健康で幸福そうに見られた。

最後に附け加えたいのは，若槻泰雄氏がその著「原始林中の日本人」のなかに「日本政府は南米の奥地に日系土人を生産している。日本人の可能性を南米の原始林中にすてたのだ」と述懐している。このことは今なおアマゾン流域やアンデス山系に生きている日本人にあてはまるような気がしてならない。それに比べてここの富山県出身者は，標高 400m

足らずのブラジルの東南部に開墾の斧を響かせたものの，ラプラタ河上流の恵まれた土地であり，60年近い時の流れのうちに県人の努力と忍耐が，今私のみる緑にはえる沃野を現出した。

ただ50数年前の過去を顧みて，生まれ故郷の土地を捨て，未知の原始林に50日の航程を経て地球の裏側に辿りつく，果してその心情如何ばかりのものであろうか。私は置県 100年記念富山県南米親善訪問団有志より提供された壮行歌をここに呈示し，この歌に送られ，また船中で歌い意気を高めたことであろうと思い，悲壮感がまざまざ身に迫る気がする。

また私ども２人は一夜の宿であったが，その朝，市川氏の暖かいもてなしの献立は，ニワトリのカラ揚げ，卵とじ，牛肉のフライ，魚のフライ，サシミ，トロロイモとちくわのサラダ，胡瓜と白菜の漬物，ごはん，ビール，コーヒー，とくにサシミは昨日私どものために20km離れた川で獲ってきたもので，冷蔵庫で見せてもらったが約１ｍ位，味は鱈のようで新しく，２週間振りの味覚だった。ただし魚の名前は失念。

私どもは第３アリアンサを離れるに当り，集会場前に多くの人々から「螢の光」の合唱のうちに別れをおしんだのは，今なお心のうちに去来する。

附記　サンパウロ市への帰途ミランドポリス市庁を表敬訪問した。市議会議場において市長，市議会議長の歓迎の言葉があり，その節，富山県議会議員，高岡市議会議長と私に一つの書状が送られた。これを翻訳し以下に記する。

第25図　ミランドポリス市議場にて，団員代表に友好の証を贈る議長ワルデイル・メンアス・アントネス氏

**渡伯開拓民壮行の歌**

―神戸市　日伯協会―

一、行け行け同胞海越えて
　遠く南米ブラジルに
　み国の光輝やかす
　今日の船出ぞ勇ましき
　バンザーイ　バンザーイ　バンバンザイ

二、行けや同胞海越えて
　南の国やブラジルの
　未開の富を拓くべき
　これぞ雄々しき開拓者
　万歳　万歳　万万歳

三、渺茫ひろき大海や
　万里はてなき大陸や
　何れか宝庫ならざらん
　君成功の日近し
　万歳　万歳　万万歳

◇今より五十余年前，神戸港出帆のブラジル開拓民を神戸市小学生が歌って歓送した思い出の歌です。

**開拓民壮行歌**

―日本力行会―

一、いざや友よ白妙の
　雪の心と黒鉄の
　強き腕のあらんもの
　世界はやがで汝がものぞ

二、希望に燃ゆる同胞よ
　心開きて眼をあげよ
　アマゾン岸の人知れぬ
　五千哩の大自然

三、自由を望む人や行け
　富士より高きアンデスの
　平和の嶺を越えてかの
　ラプラタ河畔の夕の空

◇拓植大学の学生はじめ海外雄飛に燃えた青年が互いに励まし合って船出したとき，感激の壮行歌です（五十年前）

サンパウロ州ミランドポリス市　布告第1238号

サンパウロ州ミランドポリス市長Dr.MITSUTOSHI IKEJIRI はその権能により次の布告をする

1）Senhor BUNICHI TOYOTA Medico Profesor em TAKAOKA ミランドポリス市訪問に際し，これを公式訪問とみなす。

2）この布告は公布の日から施行する。

これに反する定めは，効力を有しない。

1983年10月20日

ミランドポリス市長

Dr. MITUTOSHI IKEJIRI

上記期日にミランドポリス市行政人事局においてこれを公告し，登記する。

ミランドポリス市行政人事局長

WALDIR MESSIAS ANTUNES

## 南米親善訪問団の健康管理実施概要

私どもは置県 100年記念富山県南米訪問団の一員として参加した。出発前の打合せ会で，旅行中の団員の健康管理について依頼され，医師としてのボランティア精神で快く引き受けた。何分にも航空機とはいえ，地球の裏側までの長途の旅行と時差の関係，さらに日本と正反対の現時の気候，乾期にあたる現地の風土から，身体不調者のでることを予想し，できる限りの万全の準備をととのえたわけである。もちろん帯病者，とくに成人病（高血圧症，心疾患，糖尿病など）については主治医から旅行の可否の診断をえさせ，旅行中の薬剤持参を厳しくすすめた。なお，参加人員は 106名であった。

## 旅行時間

往路　東京―メキシコシティ（一部の人員）約20時間，東京―リマ（大部分の人員）約26時間，リマ―ブエノスアイレス約５時間，ブエノスアイレス―サンパウロ約３時間。

帰路　リオデジャネイロ―東京約29時間，時差の関係で往路はほとんど夜間，帰路はメキシコ上空より昼間飛行。

以上のような状態で生活のリズムの変調は充分考慮される。ことに給油のための通過地ロスアンゼルス，リマ(帰路)では通過客（トランジットパセンジャー）は隔離待合室か機上で心のゆとりはなかった。

## 疾患発生状況

私どもの診察した人員は41名（39%）である。病名は感冒23名(56%)，下痢腸炎(32%)，上気道炎３名，歯痛，外科疾患各１名。感冒上気道炎については気候，すなわち気温，湿度の激変が大きな誘因であろう。また，緯度の関係ではメキシコシティ北緯18度，リマ南緯18度，ブエノスアイレス南緯35度，サンパウロ南緯23度，南回帰線通過（台湾嘉義が北回帰線にあたる），リオデジャネイロ南緯22度。すなわち，旅行地のほとんどは亜熱帯。日本では晩秋，南米では初夏，気温は40℃近くまで上昇する日もあった。この気温差が体調の変化につながる。下痢は主として腸炎症状で恐らく食事の急変であろう。日本人は米飯，シーフード，野菜に慣らされているが，長期の海外旅行の経験の乏しい人々は，パンそれに南米独特の「シュラスコ」という焼肉料理，それも数種類次から次と運んでくる。「ノー・サンキュー」とはいい難く，つい過食となる。それが下痢腸炎につながったものであろう。

今回の旅行では，アンデス山中のインカ帝国の遺跡見学が組まれていた。海辺のリマよりペルーアンデスの主峯マラバト(6,425m)に連なる山系を越え，約１時間の空路で3,400mのクスコに一気に達する。午前中は休養したものの遺跡見学のため，バスで3,800mまで登行する。私どもは出発前この計画を知り，高地の気圧，酸素不足に順応せず，身体的不調を訴えるもののあることを予測していた。

急激な高度上昇による症状。クスコのホテルへ帰着後参加者のうち無選択に43名について個々面接で調査してみた。何ら異常のないいもの15名（35%），その他の28名（65%）は何らかの症状を訴えた。頭痛19名（68%），胸をしめつける，どうき７名（25%），めまい，はき気６名（21%），その他息苦しい，食欲不振，肩こり，鼻出血各１名，これらの数字は一人で２種以上の症状のものもあり，それぞれ細別してみた。すなわち，高山病に現われる諸症状であり，このうち酸素吸入を行ったもの３名，また強心剤その他の注射を行ったものであった。

以上，私どもの経験した今回の南米旅行に対する医学的な観察であり，10月10日出発，24日帰着した直行班の記録で，アメリカ経由28日帰着のものについての４日間は除外してある。これを総括すると，

1）患者発生は旅行の前半，すなわち15日以前に集中し，後半は減少している。これは滞在中南米の気候風土に漸次馴化したものと思われる。ただし，下痢腸炎は14，15日頃に多

かった。これは連日の肉類の多食が然らしめたものと想像される。

2）診療内容は何れも軽症で，1日3回分の処方で大部分軽快している。ただ，少数のものについては注射も行った。

3）出発前研修で，早期に診療を受けること，成人病の帯病者には自主的に健康管理を行わせ，その保全に努め，また主治医により旅行の可否の認定をえて参加させたことが全員つつがなく旅行を終えられたことにつながったと思う。

4）今回の旅行スケジュールは密に組まれ，休養の余裕はほとんどなかった。このような長途の旅行には少なくとも2日間位の休養日を設け，その間希望者にはオプショナル・ツアーの形式をとった方がいいのでなかろうか。また今回の南米訪問は，富山県人の最も多いブラジルに重点がおかれているわけで，最初にサンパウロで主要行事を終え，その後ゆっくり各国を歴訪することは健康管理上から得策でなかったろうかと考えられる。

5）参加人員中，おわら保存会の人々を除くと平均年齢60歳に近い。昭和52年，県人移住50周年を記念して豊田も参加したが，その節赤十字病院今井照英副院長と看護婦が専任で健康管理に当たられた。参加人員は 100名以上の場合，このような考慮が望ましい。

以上，今回の南米親善訪問団に参加しての所感であるが，富山県として今後青年の船，あるいは翼，また婦人団体，高齢者の海外の長期旅行も計画実施されると思われる。恐らく会員諸氏のうちにも診療のため同行されると思われるので，何らかの参考になればと考え，ささやかな記録であるが呈示した次第である。

（豊田文一　越山健二　永森正秋）

擱筆するに当り，今回の渡航に際し，中沖豊県知事，堀健治高岡市長，県農協各連会長より格別のご配慮をいただき深甚な謝意を表する。また親善訪問団の皆様から種々ご厚情にあずかりお礼申し上げる。

## 参考文献

1）ペーテルリビエール編纂，立原宏要，東　徹訳：世界の民族，6　アマゾニア・パンパン　平凡社
2）ペーテルリビエール編纂，中山邦紀訳：世界の民族　7　アンデス　平凡社
3）神田錬蔵：アマゾン河　中公新書
4）向陽一：奥アマゾン探険上・下　中公新書
5）向陽一：アンデスを越えた日本人　中公新書
6）北杜夫：輝ける青き空の下で　新潮社
7）若槻泰雄：原始林の中の日本人，南米移住地のその後　中公新書
8）国際協力事業団：アルゼンチン概況　ブエノスアイレス支部
9）ペルー大使館：ペルーの概況
10）大石武一，木原啓吉編：地球の選択―緑を守れ　家の光協会
11）富山県海外移民協会：ありあんさ　大正15年
12）総理府統計局編：国際統計1982
13）全域旅行社：PERU　大自然とロマンの出会い
14）豊田文一：ブラジル行　富山県農村医学研究会誌　第9巻　昭和53年